

作付面積日本一で、高級な「レンゲ蜂蜜」を生み出す岐阜県のレンゲが危機を迎えている。この10年で目立っていた害虫の被害が今年は特に深刻で、レンゲ蜂蜜の販売中止に追い込まれる養蜂農家も出ている。県や業界は「レンゲ王国」を守ろうと対策に懸命だ。

「15年ほど前、山から濃尾平野を見ると、レンゲの花で30分先までピンク一色だった。それが害虫に食われ、芝生のように」。岐阜県垂井町で「春日養蜂場」を営む春日住夫さん(53)は「今年はレンゲの蜜は一滴もとれなかった」と嘆く。

レンゲ蜂蜜はくせがなく、日本人に合うとされ、価格は輸入蜂蜜の10倍、他の国産蜂蜜の2倍にもなる高級品。「県の花」に指定している岐阜県は有数の産地だが、春日さんの養蜂場では、創業約60年で初めて販売中止に追い込まれた。

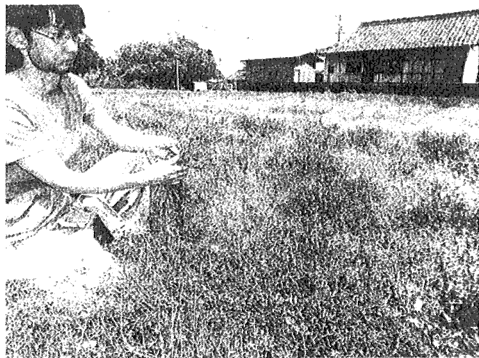
岐阜県畜産課によると、同県のレンゲ作付面積は、1996年から日本一。だが、01年の5858haが11

## 害虫深刻 作付面積が半減

# 「レンゲ王国」 岐阜県ピンチ

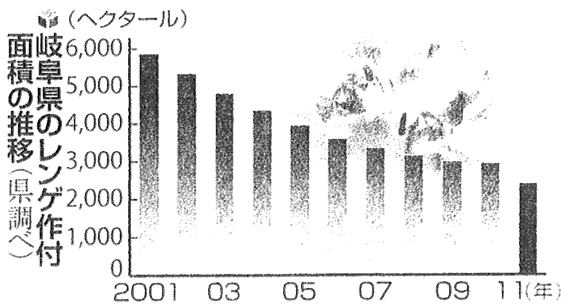
年には2380haに半減しており、同課は「レンゲ蜂蜜の販売中止による経済的損失は大きい」と話す。

作付面積が減っている要因の一つに、外来種「アルファルファタコゾウムシ」による被害がある。幼虫は体長数cmで、80年代に西日本で見つかり、99年に岐阜県で確認された後、爆発的



害虫によって芝生のようになったレンゲ畑（岐阜県垂井町で）

## 蜂蜜販売中止の農家も



に増殖。農薬で駆除できるが、ミツバチも死んでしまうため、使うに使えない状況という。

成虫は11〜12月に卵を産むため、県内の一部の養蜂農家では05年から、レンゲの種まきを通常の9〜10月

から1か月ほど遅らせる実験を行った。県によると、害虫を減らす効果はあったが、レンゲの生育も遅れ、冷害を受けたり、蜜の量が減ったりしたという。

### 天敵の八手に期待

そこで現在、この害虫の繭に寄生する天敵「ヨーロッパトビチビアメバチ」に期待が集まっている。「生物農薬」への登録を目指す日本養蜂はちみつ協会によると、アルファルファタコゾウムシだけに寄生し、人や他の虫への害もない。春日さんは「この八手にレンゲ蜂蜜の生き残りがかかっている」と話す。

県と県養蜂組合連合会では、岐阜市で天敵バチの導入試験を実施。気候などによる変動はあるが、寄生率が10%になる年もあるなど一定の効果が見られた。それをどう高めるかが今後の課題といい、同連合会の中村正会長は「農家だけでなく、行政や研究機関と協力し、『レンゲ王国』を復活させたい」と話している。